

# 「子どもたちに夢を『与える』サイエンスマンでありたい」(後編)

マラウイの人気番組「サイエンスマン」を企画、主演する青年海外協力隊の長谷宏司さんは、7年前、協力隊員になるという14年越しの夢の一つをかなえ、エチオピアにやって来た。何もかもが日本と異なる環境の中で、トライ&エラーを繰り返しながら彼が学んだことは、そしてこの6月にマラウイでの任期を終える彼が本当になんかえたい夢とは。(前編は5月号を参照)



## 途上国の子どもたちのために力を使いたい

エチオピア北部のインジバラ高校で物理を教えることになった長谷さん。着任当日、村人から泥壁泥床の穀物倉庫小屋を借り、毛布やたらいなど最低限の生活用品をそろえ、彼の新生活がスタートした。

(笑)。日本人は物持ちだと思っていたのに、こいつは何も持っていないから面倒見てやらないとだめだと思ったらしく、おかげで溶け込みやすかったですね。水道がないので、毎日水くみに行かなくちゃいけないのですが、村の女性が無言で自分のたらいに水を入れておいてくれたり、とてもありがたかった。

「つまり、僕がよくても、同じ村に住む男が洗濯するのは村の男たちの威厳を失墜させ、女性の現金収入の機会を奪う利己的な行為とも解釈できる。現地にはそれぞれの習慣やルールがあり、それを尊重することも重要です。外国人だからといって自分のやり方にこだわりすぎては、なかなか現地に溶け込めません。日本で身に付けたものは一旦リセットして、相手の懐に飛び込むぐらいの姿勢のほうがいいと思います」

学校でも日本で生徒に喜ばれた実験をたくさんやろうとするのと、生徒から「もっと卒業試験のための授業をしてほしい」と言われた。アフリカの多くの国では、卒業試験の結果がその後の人生を左右するため、試験対策に重点が置かれる。まずは現場のニーズを理解した上で、必要な改善策を取り入れていくことが大切だと気付いた。試験対策を重視しつつ、外せない実験のみ導入していたが、ある日「この実験は試験に出ないからしなくていいね」と言う、生徒から「やってほしい！試験のためではなく」と声が上がった。「子どもたちの意識が変わった

ことを実感した瞬間でした。教育の成果は見えにくいですが、やはり何らかの影響を与えていると信じています」。彼の教え子の何人かは今、難関の大学を卒業して物理教員になつていて、後任の隊員から知らせがあった。トライ&エラーを繰り返しながら奮闘しているうち2年間で、過ぎ、帰国した長谷さんは、大阪の中学校に勤め始めた。だが、日本の子どもたちを教えることにやりがいを感じるもの、意識はおのずと途上国に向けられていた。

「日本の学校では、教室に鉛筆や消しゴムがころがっていたりして、なんだかむなしくなるんです。エチオピアの子どもたちは、ペンのインクがなくなってもかんで出そうとしたり、ノートが買えない生徒は板切れに墨で書いては消し書いては消して必死に字を取るうとする。物が豊かすぎると、人をだめにしてしまうのかもしれない...」

物に恵まれた日本でも、学校も先生も教材も足りない途上国の子どものために自分の持っている力を使いたい。そう考えた長谷さんは、今度はシニア隊員としてフィリピンへ。理

「外国人は珍しいから、村人が見に来るのですが、口々に『うちのほうがましだ。ちゃんと物をそろえる。そんな生活だと体を壊すぞ』なんて言うんです」



インジバラ高校の生徒たちと設立した「サイエンスクラブ」の活動で、アルコーンに着火した炎で自力上昇する「熱気球」の実験の様子。長谷さんは「理論と実際との橋渡しがしたい」と、エチオピア初の「科学競技大会」も企画し、各地の教育事務所や学校を地道に回って協力を求め、帰国直前によく開催にこぎ着けた



Hase Koji

青年海外協力隊

# 長谷 宏司

挑戦者たち  
Stories of  
Challengers  
Vol.20 (後編)

「みんながつながりを持てば  
世界はもっと良くなる」

「もしもし？ アニタ？ 聞こえる？」  
携帯電話を握り締め、途切れがちな  
回線の中で何とか意思を伝えようと  
する長谷さん。

2006年12月、フィリピン・ルソン島  
南部を襲った台風により、アルバイ  
州マヨン火山周辺で大規模な泥流災  
害が発生し、死者・行方不明者数は  
1,300人強に上った。被災地は長谷  
さんの以前の任地だ。ニュースで災  
害を知った彼は、すぐさま友人たち  
に連絡を取り、1人の安否を確認し  
たが、行方不明の友人もいるという。  
「あの状況で行方不明ということは、  
生存の可能性は低いかもしれない…」  
と肩を落とす。

取材の間、長谷さんは友人に送  
金するため銀行に立ち寄った。「たい  
した金額ではないですが、ゼロよりま  
ましましょう。こういうとき助けになる  
のは、やっぱりお金だと思っんです。  
何もかも失った彼らには…」

もし日本にいたら現地に駆け付け  
ずにはいられなかった。それでも今  
は、携帯電話が結んでくれる。送金し  
た友人から届いたメールには、短くも  
切実な感謝の言葉がつつられていた。

長谷さんは「8月に火山が噴火した  
ばかりの後に大型台風が来ることは  
事前に分かっていたのだから、政府  
は泥流災害を警告できたはず。そう  
すれば、多くの命が失われずに済ん  
だのに…」と悔しがる。

2年間暮らした任地は、世界のどこ  
にいても「つながり」を感じる大切な  
場所だという。「つながり」 漠然と  
しているようで、実感として心を占め  
るかけがえのない財産。長谷さんは  
「どうか世界に出てほしい。そこで出  
会った人々は確かに同じ地球に生き  
ている、と実感できる。皆にたくさ  
んの『つながり』ができれば、世界はも  
っと良くなるのではないかと訴える。



サイエンスマンを見る子ども  
の輝き始めた瞳は、科学  
へのまなざしそのもの

ピンか？ 学費が安いし、高齢で  
入学する人も珍しくありません  
準備期間が必要かもしれないけ  
れど、最短で4〜5年で医師免  
許が取れると思います。遅くと  
も50歳で医者になれたとして、  
70歳まで働けたら20年は  
あるじゃないですか。それに、  
僕はあと何時間か操縦訓練すれ  
ば小型飛行機の免許が取れるん  
です。医師と小型機の免許。こ  
れは夢のコンビネーションです  
よ。シユバイツァーのように途  
上国の農村で医者をしなが

必要などころに自分で操縦して  
行って治療ができる。そして  
時々子どもたちに科学の話をし  
て、残りの20年を本当にやりた  
いことにかける。今から考える  
だけでワクワクします。そんな  
ふう生きて死ねれば最高です  
よね。こんな話を日本でしたら、  
顔洗って出直して来い！ って言  
われそうですが（笑）。自分の人  
生、やりたいことをとことんや  
って、しかもそれが少しでも人  
の役に立てばなお結構ですよ。  
今、先進国日本に住む多くの

人々は幸福なのだろうか？ 自分  
たちだけが幸せになるんじゃない  
かと、それを分け合って周りも  
幸せになるのを見れば、もっと  
心が豊かになっていくと思いま  
せませんが、自分だけでも自分  
のことを信じたい」

気、その困難と、それ以上の喜  
びがあることを思い出させてく  
れる。  
「大人が子どもたちに夢を与え  
てあげられない」と憂えていた  
マラウイ人。だが、それは日本  
の社会にも言えることではない  
か。日本や途上国の子どものた  
ちが、あきらめずにチャレンジし  
続ける長谷さんの姿に勇気付け  
られていたように、まずは大人  
が夢を持つことが、子どもたち  
に夢を与える「近道なのかもし  
れない。



15歳のマラウイの少女からサイエンスマンに届いたファンレター。「番組  
からたくさんのお話を学んだので、私もいつかサイエンスレディーになっ  
て一緒に番組を作りたい」とつぶやいている。「自分の日々の授業に生か  
せるアイデアに感謝している」という教員からの手紙も多い。長谷さん  
は「サイエンスマンを見た子どもたちが、大人になって番組を復活させ  
てくれたらうれしい。もし僕がいつか医者になってマラウイに戻ってきたら、  
『帰ってきたドクターサイエンスマン』ができればいいですね」と笑



熱気球の実験を楽しむフィリピンの小学生(隊員主催のサマースク  
ールにて)。「先生が楽しい授業をすれば生徒は変わるし、生徒が  
変われば先生も変わり、いいサイクルが生まれる。」と長谷さん

数科教師隊員の活動を取りまと  
めて「初中等理科教員研修強  
化計画」の支援に携わった。  
しかし「フィリピンはエチオピ  
アほど困窮していないので、生  
活面では恵まれていたけれど、  
活動面は難しかった」と振り返  
る。フィリピンでは外国人が授  
業を持つことができないため、  
隊員の役割は教員への指導だが、  
活動は自主性を重んじたばかり  
に、皆を一つの目標に向けて取  
りまとめるのは容易ではなかつ  
たという。

もいるでしょう。でもそれは考  
え方次第です。うまくいかない  
原因を、周囲のせいにするので  
はなく、自身を振り返ってみる。  
すると多くは自分に非があるこ  
とに気付きます」  
長谷さんは、自分とは異なる  
考え方に接すると、なぜそう考  
えるのかわかりたくなるという。  
「苦手だから付き合えない、と  
いうのも一つの選択肢ですが、  
僕は逆に、この頭にくる人にと  
こまで仲良くなれるかな、と考  
える。いろいろ話してみるとい  
い面も見えてくる。もちろん最  
初は忍耐力が必要でしょう。で  
もやっぱり人間は面白い。自分  
と違う価値観はどう生まれるの  
か、互いに譲れない価値観があ  
ったときにどこまで歩み寄れる  
のか、見つめるのは面白いです  
よ。それは会議や交渉の場では  
できないと思います。普段から  
人間的な付き合いをしていれば、  
そういう場でも歩み寄りのチャ  
ンスが出てきますが、それなし  
に話しても、互いに自分の主張  
をするばかりでしょう。だから、  
異文化の人と仕事をするときには、  
まずは仕事抜きで一緒に食卓を  
囲むような交流をすることが大  
切です。そこからがスタート。

サイエンスマンの夢

日本人には業務上の付き合いし  
かしない人が多いですが、確か  
に仕事はできても人間的な魅力  
やソーシヤルスキルに欠けると  
いうか、もっと人間的な付き合  
いをすればうまくいくのになあ  
と思うことがあります」  
そう穏やかに話す長谷さんの  
一つ一つの言葉には、紆余曲折  
の人生の中で積み重ねた経験や  
失敗から吸収したすべてが詰ま  
っているように思える。



マラウイの「中等理科現職教員再訓練プロジェクト」で行われる教員研  
修のトレーナーたちを支援する理科教師隊員たち。「あいまいな知識を  
考え直してもらおう」ことが目的で、間違っ理解しがちな問題を四択ク  
イズ式にして問い掛ける。トレーナーとしてのプライドを傷つけることなく楽  
しく学び合うことができ、隊員の技術レベルも向上するという

フィリピンの任期を終え、マ  
ラウイへ来てもうすぐ2年。隊  
員として、サイエンスマンとし  
ての活動が終了する日が近づい  
ている。「マラウイ人がサイエン  
スマンを引き継いでくれるのが  
理想ですが、すぐじゃなくても  
いいんです。例えば今の子ども  
たちが大人になって、昔テレビ  
で見たサイエンスマンを復活さ  
せたいと思ってくれるかもしれ  
ません」。

子どもたちに影響を及ぼし、社  
会に変化を与えるはず。そして  
いつか人種や国境を超えて手  
取り合い、地球が直面している  
課題に勇気を持って立ち向かっ  
てほしい。そう願う彼自身は、  
これからどんな道に進むのか。  
「笑われるかもしれないです  
が、まだ医者になりたいんです。  
JICAの教員研修支援の活動  
もやりがいがあるので続けたい  
気持ちもありますが、自分が一  
番やりたいことはやっぱり医者  
なんです。今41歳で、どんな  
不利になっていきますが、フィ  
リピンに戻って医学部に入りた  
いと思っています。なぜフィリ

対象地域の初等中等教育において、理科現職教員が  
生徒中心の授業が行えるよう授業構築力・教科指導力の向  
上を支援する技術協力プロジェクト。2002 - 05年に実施。

Hase Koji

はせ・こうじ 青年海外協力隊シニア隊員(プログラムオフィサー)。1965年  
大阪府出身。塾講師、専門学校講師、自動車会社、病院勤務などを経て、96  
年に高知大学理学部に入部。2000年に卒業後、青年海外協力隊に参加し、  
エチオピアへ赴任(理科教師)。02年に帰国後、公立中学校教員、商社ケニ  
ア駐在員などを経て、03年に青年海外協力隊シニア隊員(理数科教師)とし  
てフィリピンへ。05年から現職。